

キャサリン・マンズフィールド作

桃山まや訳

ドイツの保養所で

In a German Pension, by Katherine Mansfield, Translated by Maya Momoyama

第七話 レーマンの部屋

たしかに、ザビーナにとって人生はのんびりしたものではなかった。彼女は朝から晩まで働き通しだった。五時にベッドから飛び降りると、服のボタンを留め、黒い仕事着の上から袖の長いアルパカのエプロンをかけて、暗がりの中を手さぐりでキッチンへと下りていった。

料理人のアンナは、夏のあいだにすっかり太ったからだをベッドに横たえたままぐずぐずしていた。大きな上掛けの下に居る間は、コルセットをつける必要もなかったし、イエスさま、マリアさま、聖アントニーさま、わたしの人生が穴蔵の豚みたいになりませんようにと唱えながら、思いつきり手足を伸ばして転げ回ることもできたからだ。

ザビーナは新入りだった。頼にはまだほんのりと赤みがさしていて、口の左側には小さなえくぼができた。どんなにしかつめらしい顔をしても、えくぼがひよっこりのぞくと人のよさがすぐにばれてしまう。アンナはこのえくぼをよく褒めてくれたが、それはあと三十分ベッドにいさせてほしいという合図にほかならなかった。ザビーナにとって、火をおこし、キッチンを掃除し、前の晩から残っているカップやソーサーの山を全部一人で片付けることを意味していた。皿洗いのハンスは七時よりも前に来ることはなかった。ハンスは肉屋の息子で、貧弱なからだつきが父親の作るソーセージにそっくりだ、とザビーナは思っていた。赤い顔にきびをいっばいこしらえて、ぞつとするほどきたない爪をしていた。レーマンさんが、ヘヤーピンで爪の掃除をするようにと言っても、生まれつきだからこれ以上はきれにならないと答える始末だ。こうなったのもとはといえば、肉屋の出納を任されていた母親が、いつも手をインクだらけにしていたからだ、というのがハンスの言い分だったが、ザビーナはその話を信じ込み、ハンスを気の毒だと思った。

ミンデルバウの冬は早かった。十月の末にもなると、通りの両側には腰の高さほどもある雪の山ができた。大勢の「保養客」たちは、冷水とハーブにはもううんざりだとい

わんばかりに慌ただしく去っていった。レーマンさんの店でも広いサロンは閉められ、開いているのは朝食用の食堂だけとなっていた。七時半には店を開けるので、それまでに床を磨き、テーブルを拭いてカップと砂糖入れをそろえ、壁に並んだフックに新聞や雑誌を挟んでおかなければならなかった。

いつもだったら、カフェに通じる売店には、レーマンさんの奥さんが出ているのだけれど、折よくお客の少ないこの時期に赤ん坊が生まれることになり、ただでさえ大きな身体がさらに大きくなってしまったので、そんな身体でうるうるされたら食欲がなくなってしまうから二階で縫い物でもしているように、とレーマンさんから止められていたのだった。

サビーナは特別な手当てのことなど考えもせず奥さんの仕事を引き受けていた。彼女はカウンターの途中で、アンナが作ったとびぎり美味しいチョコレートケーキを切り分けたり、砂糖でくるんだアーモンドを、ピンクとブルーの縞柄の袋に詰めたりするのが好きだった。

「そんなに立ちっぱなしだと、今にあたしみたいに静脈瘤ができちゃうよ」アンナが言った。「レーマンさんの奥さんがいい例じゃないの。あれじゃ赤ん坊なんか生まれてこないかもしれないよ。太くなるのは足ばっかりなんだもの」アンナがそう言っつのをハンは面白そうに聞いていた。

午前中は比較的暇だった。サビーナは呼び鈴に答えたり、寒さしのぎに一杯やっつくお客に給仕をしたり、二階にいる奥さんに何か用事はないかとたずねたりしていた。しかし午後になると、馴染みの客が六、七人やってきてトランプを始め、誰とはなしにコーヒーや紅茶を飲みにやってくるようになった。

「サビーナ…。サビーナ…」

サビーナはテーブルの間を飛びまわっていた。手のひらの小銭を数え、キッチンとの境にある小窓からアンナに注文を伝え、お客たちに重たいコートを着せかけてやっていた。サビーナは子供のような雰囲気を漂わせ、終わりのないパーティーにでも出ているように楽しそうに見えた。

「レーマンさんの奥さんはお元気？」店にやってくる女たちが小声でたずねた。

「少し元気がないようですけど、ご心配いただくほどではありませんわ」とサビーナはうなずきながら打ち明け話でもするように答えた。

レーマンさんの奥さんにいよいよ試験のときが近づいていた。アンナは友達と話す時にかぎって、そのことを奥さんの「ローマへの旅」と言っていた。サビーナには何のことかわからなかったが、無知だと思われるのが恥ずかしかったので、だれにも聞かずに自分ひとりで考えていた。サビーナにわかることといったら、奥さんのお腹の中に赤ん坊がいて、とても痛い思いをしなければ生まれてこないということだった。もちろん、夫がいなければ子供を生むことができない。ということも知っている。でも、男の人がそのこととどんな関係があるのだろうか。夜になっても、紅茶用のフキンをつくるい

ながらサビーナは不思議に思っていた。生まれるとはどういうことだろう？ サビーナは考えた。死ぬのはとても簡単なことだ。サビーナはおばあちゃんが死んだときのことを思い出していた。黒い絹の服を着せられ、平べったい胸の上に置かれた十字架をくたびれた手で握りしめていたおばあちゃんの姿。妙にぎゅっと結んだ唇がどこことなく笑っているように見えたこと。おばあちゃんだって一度は生まれてきたのだ。これは紛れもない事実だった。

ある晩、サビーナがカウンスターの中に腰を下ろして考えこんでいると、若い男がやってきてポートワインを注文した。サビーナはゆっくりと立ち上がった。長い一日が終わろうとしていた。部屋の中は暖かく、彼女の動きは緩慢だった。しかし、ワインを注ぎながら、その男が自分を見ていることに気がつく、サビーナはえくぼを見せて微笑んだ。

「外は寒いでしょ」サビーナはワインのビンにコルクの栓をしながら言った。

若い男は笑いながら頭の雪をすばやく払いのけた。

「熱帯とまでは言わないけど」若い男が言った。「あんたは随分暖かそつだね 居眠りでもしてみたいだ」

ひどく疲れを感じているサビーナの耳に、若い男の声はずしりと響いた。これほど頑丈そうな人は見たことがない、とサビーナは思った。テーブルなんか片手で軽々と持ち上げてしまいそつだ。そして、その男が自分の顔や身体に落ち着きなく視線を走らせるのを見て、身体の奥深いところから、怖いような、嬉しいような……何ともいえない奇妙な興奮が湧き上がってくるのを感じた。サビーナはそこから動きたくなかった。男がワインを飲んでいるあいだはそばにいたいと思った。二人の間に沈黙が下りた。やがて、男はポケットから一冊の本を取り出した。サビーナはふたたび縫い物に向った。本のページをめくる音や、金縁の鏡の上にかけてある時計の力チカチという音だけが聞こえていた。サビーナはもう一度男の顔を見たいと思った。この人はただものではない。声にしても、服の着こなしにしても。その時、奥さんが足を引きずるように歩く音が二階から聞こえた。するとあの考えがまたサビーナを不安にさせた。自分もいつかあんなふうになるのだろうか。あんな気分を味わうことになるのだろうか！ けれど、かわいい服を着てはしゃぎまわる赤ん坊がいたらどんなにいいだろう。

「娘さん 名前はなんていうの 何かうれしいことでもあるのかい？」若い男が言った。

サビーナは赤くなり、両手を膝の上において、誰もいないテーブルに目を走らせながら首を振った。

「ちよつとこつちに来てごらん、写真を見せてあげるから」男は強引だった。

サビーナは男のそばに立った。男が本を開くと、オペラハットを浅くかぶった娘が、裸のまま壊れかけたベッドの端に腰を下ろしている色刷りのスケッチが出てきた。

男は体の部分を手のひらで隠し、顔だけみえるようにしてサビーナの様子をうかがった。

た。

「どうだい？」

「どうって何が？」サビーナはわざとわからない振りをした。

「あなたの写真みたいだろ　ほら、この顔を見てごらん　俺にはそう見えるけどね」

「でも、髪の毛の形が違うわ」「サビーナは笑いながら言った。頭をのけぞらせて白いのどをひくひくいわせている。

「結構いい絵だろ？」若い男が言った。サビーナは、男がはめている奇妙な指輪を見ながらうなずいた。

「今までにこういう絵を見たことがあるかい？」

「ええ、絵の入った新聞にならこういっておかしなのがいくらでも載っているもの」

「あなたはこんな風に写真を撮ってもらいたいとは思わないかい？」

「わたしが？　そんなもの誰にも見せたくないわ。それに、そついつ帽子も持っていないし」

「帽子なんてどうにでもなるさ」

ふたたび沈黙がおりた。アンナが小窓をあけたのでサビーナはキッチンに飛んでいった。

「ほら、ミルクと卵よ、二階に持って行って」「アンナが言った。「お店にいるのはだれなの？」

「おかしな人！　ここがちよつといかれてるみたい」「サビーナは自分のおでこをたたいた。

二階に上がると、奥さんが雑然とした部屋の中で縫いものをしていた。黒いショールを肩にかけ、毛系の靴下を履いている。サビーナはテーブルの上にミルクを置き、エプロンでスプーンを磨いた。

「他に入用の物はありませんか？」

「そうねえ」奥さんは椅子の上に身体を起こして言った。「うちの人はどこにいるの？」

「スニポルドさんのところでランプをしておいでです。お呼びしましょうか？」

「好きにさせておくわ。あたしのことなんかどうだっていいんだから。だいじょうぶ…こつして待つてるわ」

奥さんは手を震わせながら、太い指でコップの縁をぬぐった。

「ベッドにお連れしましょうか？」

「もう行って。一人になりたいの。ハンスにお砂糖をなめさせないようってアンナに言つといてね　なめたら耳のところにをひっぱたいとおやりって」

「やだ、やだ、やだ」「サビーナは引き返しながらかそつづばやいていた。カフェに戻ると若い男がコートのボタンをかけて帰り支度をしていた。

「明日また来るよ」「男が言った。「髪をそんなにきつくしばらないほうがいいな。きれ

いな巻き毛がだいなしだ」

サビーナは寝る支度をしていた。アンナはすでにいびきをかいて眠っている。サビーナは長い髪にブラシをかけ、たばねて両手で持ち上げた……そうね、カールがとれてしまったらがっかりだわ。サビーナは飾りけのないシュミーズを見下ろすと、すくと脱ぎ捨ててベッドの端に腰を下ろした。

「あつたらいいのに」サビーナはささやきながら眠たげに微笑んだ。「この部屋にうんと大きな姿見があつたら……」

闇の中に横たわって自分の華奢な身体を抱きしめた。

「百マルクもらつたつて奥さんのようにはなりたくない　　ううん、千マルクもらつたつてあんな姿になるのはいや」

サビーナは半分夢を見ながら、ポートワインのビンを片手に持って、椅子に腰掛けたまま伸び上がつてあの男を迎えている自分の姿を思い描いていた。

翌朝は暗くて寒かった。サビーナはぐったりした気分で目を覚ました。一晩じゅう重たい物が胸の上に乗っていたような気がする。誰かが廊下を歩いているのが聞こえた。レーマンさんだ！　寝すごしてしまったんだわ。ドアの取手がガチャガチャ鳴った。

「はい、いただきます」サビーナは靴下を上げながら答えた。

「サビーナ、アンナに奥さんのところへ行くように言ってくれないか　　今すぐに。俺は産婆を呼びに行く」

「はい、わかりました！」サビーナは答えた。「もう生まれたんですか？」

しかしレーマンさんはもういなかった。サビーナはアンナに駆け寄って肩をゆすった。「奥さんが　赤ちゃんが　レーマンさんがお産婆さんを「うまく言葉がつかない。い。」

「なんですつて！」アンナがベッドから飛び降りた。

今日は泣き言一つ言わなかった。ただ事ではないんだ　　アンナが血相を変えている。

「オーブンに火をつけてお湯をわかしておいてね」　　アンナはブラウスのボタンをかけたながら、まるで目の前に奥さんがいるみたいな調子でしゃべった。「はい、はい、わかつてますよ　　いいことの前には必ずつらいことがあるもんです　　わたしがおりますから　　どうかがんばってくださいよ」

どんよりとした一日だった。店を開けるとすぐに灯をいれなければならないほどだったが、客足が途絶えることはなかった。アンナは産婆と一緒に奥さんの部屋から出てきていたが、働きもせず、頭上に流れる音楽を聴きながら隅の方に腰を下ろしていた。ハンスはサビーナよりも奥さんに同情的だった。こちらも仕事をほったらかしにして窓のそばで鼻をほじっている。

「なんであたし一人が働かなくちゃならないの？」「コップを洗いながらサビーナが言った。「あたしたちに何ができるつていつの。それにしてもお産にこんなに時間をかけるなんて、奥さんも奥さんよ」

「しっ」アンナが言った。「奥さんをこの上の寝室に移したみたいだね。この上ならお客さんの邪魔にならないもの、ほら、うめき声がする。」

「ビールを二本頼む」レーマンさんが小窓の向こうから叫んだ。

「はい、ただいま」

八時になっていた。もうお客は一人もいなかった。サビーナは縫い物もせず店の隅に腰を下ろしていた。奥さんに変わりはなかった。変わったことといったら 医者がやって来たことくらいだった。

「ああ」サビーナはつぶやいた。「お産のことなんか考えるのもいや。聞きたくもない。

ああ、どっかに行ってしまいたい　　こりりんざいお産の話なんか聞かないから」サビーナはテーブルに両肘をつき　　手のひらにあごを乗せて唇をとがらせた。

しかし、店のドアがとげん開いたので、勢いよく立ち上がり笑顔を作った。入ってきたのはあの若い男だった。今度もポートワインを注文したが、本は持ってきていなかった。

「そんな遠くに坐るなよ」男は不満そうに言った。「あんたと楽しくやろつと思つてきたんだから。コートを頼んでもいいかい、乾かしてほしいんだ　　雪がまた降ってきたね」

「いい場所があるわ。女性専用のクロークだけど」サビーナが言った。「そこにかけておくわね　　キッチンのすぐそばよ」

サビーナに幸せな気分が戻っていた。

「俺も行くよ」男が言った。「どっにかけるか見ておきたいから」

そうすることが特別なことだとは思わなかったので、サビーナは笑いながら男を手招きした。

「ここよ」サビーナは大きな声で言った。「なんて暖かいのかしら。もっと薪をくべるわね。平気よ、みんな二階だから」

サビーナは床に膝をつき、いたずらっ子のように笑いながら、ストーブの中に薪を投げ入れた。

奥さんのことは忘れていた。忌々しい出来事もみんな忘れた。誰かが自分のそばで一緒に笑っている。小さな部屋で、一緒になってレーマンさんの薪を燃やしている。これ以上の冒険があるだろうか。サビーナはいつまでも笑っていたかった　　いや、泣き叫びたかったのかもしれない　　そうでなければ　　そうでなければ　　若い男を抱きしめたいと思ったのだ。

「きれいな炎ね」サビーナは両手を火にかざした。

「さあ、この手につかまって立てよ」若い男が言った。「明日の朝おこられるぞ」

二人は手をつないだまま向き合って立っていた。そのとき、サビーナの身内にかつて経験したことのない戦慄が走った。

「ねえ」男が乱暴に言った。「子供のまねかい、それとも俺をからかっているのかい？」

「あたし　あたし」サビーナの顔から笑いが消えていた。男を見上げたがすぐに床に目を落とし、おびえた小動物のように息を弾ませている。

男がサビーナを抱き寄せて唇にキスをした。

「なにをするの？」サビーナの声はかすれていた。

男がサビーナの手をはなした。男の手は彼女の胸の上に置かれていた。サビーナの手で部屋がぐるぐる回っていた。するととっぜん、二階から世にも恐ろしい、引き裂くような悲鳴が聞こえた。

サビーナは男の手を振り解いて身体を固くした。

「だれ　だれが叫んだの？」

静寂を破って産声が聞こえた。

「ああ！」サビーナは叫びながら部屋から飛び出して行った。